

## 中世スペインにおける、モリスコとセファルディの追放前および追放後の アイデンティティについて（1492 - 1609）

報告者 ルミ・タニ・モラターヤ

ムスリムがイベリア半島に入った年代については、711年と明確である。しかしながら、この時期より以前に、イベリア半島に入植し定住していったユダヤ人については、その入植を始めた時期がいつであったのかということについてさまざまな説がある。共存の証とも言われたアル・アンダルス支配下に置かれたユダヤ人にとって彼らはどのように支配者ムスリムおよびキリスト教国王達から扱われてきたのか。確かにスペイン系ユダヤ人（セファルディ）のディアスポラはムスリムがイベリア半島に入ってくる前から度々あった。しかしイスラム教以外にキリスト教そしてユダヤ教を尊重するというアル・アンダルスの空間の中でお互いのアイデンティティはある程度まで守られた。だがカリフ王朝の時代にはキリスト領土からキリスト教徒の学者や学徒達が学問の知識を得るためにアル・アンダルスに訪れるぐらいだったその文化的な交流や融合にもかかわらずアル・アンダルス領土内でも11世紀にイベリア半島に侵入してきた北アフリカの新興勢力で熱狂的なイスラム原理主義集団アルモラビデ（ムラービト）約五十年後にひきつづいて上陸してアルモラビデの地位を奪ったアルモアーデ（ムワッヒド）に迫害を受け、その上キリスト教国領土内で行われた1478年の異端審問制度導入のためこの時点で17万人のユダヤ人のディアスポラはすではじまっていた。残ったユダヤ人はキリスト教国王達のもとで、財政業、金融関係（軍隊の指揮と法制関係の仕事以外）に携わり、彼らの立場はその時代によって微妙に変化した。つまりある時は「特権をにぎった恵まれた者」になったし、ある時は伝染病、飢饉による不安定な時代では国民の憎悪の対象になった。

ユダヤ人のディアスポラが西ゴード民族支配から始まっていたのに対してモリスコ（この名称については様々な意見がある）の追放は国土回復戦争（レコンキスタ）が終わった1492年から始まったと言ってもいいだろう。グラナダ協定は異教徒に対して見かけだけ寛容的だったが「異教徒による暴動が増えた」という理由によって1502年に同協定は無効になる。これによってスペインに残ったモリスコそしてユダヤ人の生き延びる為のサバイバル術として三つの選択が現れる。

1. 素直に改宗する。（旧ユダヤいわゆるコンベルソのなかでも、Ignacio de Casas または Alonso de Espina のようなコンベルソは、旧ユダヤ人と勘違いされたくない為にわざわざ異端審問制度を強く支持していた。）
2. 改宗しない。（最初この選択をした者も後に命に関わる事だと悟ると改宗する。）
3. タキーヤ（イスラム慣例によって生き延びるために表面的にだけ改宗する。ユダヤ共同体も似たような偽装改宗方法で自分達の宗教およびアイデンティティを守ろうとした。）

この三番目の選択がもっとも多くもちいられた理由の一つは、命にも関わらず先祖伝来何百年にも住み慣れた土地を去らず、自己の文化そしてアイデンティティを守ろうとしたことにあった。

この他にバレンシアなどではキリスト教国王達に罰金を払って改宗をまぬかれようとしており、サラゴサではキリスト教の地主らによって1502年の追放勅令の実行は延期される。その後カルロス五世の勅令や異端審問所、*Capilla Real*の裁定でありとあらゆる手段で彼らの家族構造やアイデンティティの破壊を試みて強制改宗に力をいれるがまだこの時点では場所によって締め付けが穏和的だったといえるだろう。しかし1566年のフェリペ二世の勅令以来事態はたいそう厳しくなる。これによってモリスコであり最後のウマイヤ朝の子孫と言われたアベン・ウメーヤの暴動が勃発する。1609年にいたるまでスペインを去るモリスコは北アフリカへ、同じくスペイン系ユダヤ人（セファルディ）はヨーロッパ、またはオスマン帝国の拠点地であったトルコに逃れていく。しかし受け入れる側となる北アフリカ、ヨーロッパ諸国、オスマン帝国では事情がさまざまだった。全ての国が心から彼らを受け入れたとはいえない。セファルディがオスマン帝国の行政関係にたずさわりすぐに社会階層に吸収され、またアムステルダムやハンブルグでは商業や貿易関係の仕事で新たな人生をスタートさせたと違って多くのモリスコはタキーヤとしてスペインで自分たちの宗教を守りぬいたにもかかわらず、今度は反対に同胞のムスリムから「はたしてどこまで真のイスラム教徒なのか」といった疑いの目を向けられるようになる。そして結果的にこの違いによって対立するケースもでてくる。このようなことがモリスコにとってどれだけ大きな精神的な打撃であったらうかは、今日でも想像できる。